

基調トーク：エスプリの効いた観光



細田 衛士 HOSODA, Eiji

中部大学副学長、経営情報学部長・教授、慶應義塾大学名誉教授、香蘭女学校理事・評議員など。専門分野は環境経済学。研究テーマは資源循環利用の経済分析。

ABSTRACT

In order to practice sustainable tourism, it is important to learn from past cases of failure. The "Comprehensive Recreation Area Development Law" (the so-called "Resort Law"), for example, lead to development without any fixed principle and resulted in destruction of the natural environment. Development that ignores the natural environment, history / tradition, society / culture, and local activities that are unique to the region does not bring about sustainable tourism. In this paper, we will consider how to bring about sustainable tourism with the two words of "regionality" and "esprit" as keywords.

1. 失敗から学ぶ

1987年、政府は「総合保養地域整備法」いわゆる「リゾート法」を制定した。この法律の狙いは、リゾート産業の振興と発展を促すとともに、より多くの国民が余暇の時間を持ち生活を楽しむようにすることである。民間セクターを積極的に利用することで観光ビジネスを活発化し、リゾート施設を総合的に整備することも本法律の目的の1つである。確かに民間セクターの力を利用し、観光ビジネスが盛んになれば、国民も従来よりもいっそう余暇を楽しむことができるに違いない。

しかしながら、リゾート法は成功したとは言えない。無定見な開発によって自然環境が破壊された例は枚挙にいとまがない。この法律の下でなされた開発そのものが失敗だったともいわれている。地域に大きな資本が投下されることによって地域が潤うはずであったが、実際、そうはならなかったのである。その典型例は宮崎県のシーガイアの破綻であろう。同様の例は他にもある。開発予定企業の撤退などによる跡地の処分問題を残すだけ、というケースが相次いだ。

リゾート法によるものだけではなく、こうした資本投下による観光開発には1つの特長がある。観光ビジネスによる収益に重点を置いた観光開発は、往々にして地域固有の自然、歴史や伝統、地域社会と文化、地域の日々の営みなどを無視して行われる。そして金太郎あめの用なのっぺりとして地域性に欠けた観光施設が立ち並ぶことになる。確かに、短期的に地域が経済的に潤うこともあるが、長期的には持続可能ではない。

2. 観光のビジネス化

ただ、私はあらゆる観光のビジネス化を否定しているわけではないことを強調しておきたい。ビジネス化された観光すべてが悪いわけでもないし、非持続的であるということもない。事実、ビジネスによって持続可能な観光が実現されるケースも多く見られる。そもそも、観光によって地域経済が潤わないと持続可能な観光と言っても「絵に描いた餅」になってしまう。

問題は、地域の自然環境、地域の伝統と歴史や文化、地域の日々の生活の営みと経済をいかにバランスさせるかということである。リゾート法による開発は、こうしたバランスがほとんどと

られていなかったといえる。あまりにも「経済性」すなわち「利益」が優先されたためであると考えられる。地域性を大切にする「エスプリの効いた観光や旅」が地域経済社会を持続的なものにするのではないだろうか。

ここで、地域性を大切にしながらビジネスを取り入れた観光の例を1つ取り上げてみよう。それは小樽市の例である。

昭和 50 年代、小樽市は運河の埋め立て問題で議論が2分されていた。既に経済機能を失いかけている上、水質汚濁で悪臭を放っていた運河の埋め立て・道路建設案が市から提案されたのである。小樽の運河は町の情緒を映し出し、小樽市の象徴的な存在ではあったものの、当時の社会的雰囲気から言えば「開発」が有力な道筋であり、小樽市もその例から漏れなかったのである。運河をつぶしてその上にバイパスを通せば小樽市に一定の経済効果がもたらされる。当然市民の多くが運河の埋め立て、バイパスの建設に賛成した。

しかし一方、運河の利用に長く携わってきた人々、芸術家、小樽の文化と伝統をこよなく愛する市民たちが集まり、運河の埋め立てに対して反対運動を起こした。地域共同体の内部、知っている者同士のあいだで賛成・反対の議論が起きるのは決して好ましい状況ではなかったに違いない。議論は10数年に及んだという

結果から言うと、小樽市の運河の全面埋め立ては回避され、一部のみが埋め立てられた。そればかりではない。運河沿いの街並みを整備することによって観光スポットになったのである。運河沿いにはガス灯が備えられ、石造りの倉庫群はそのままレストランや土産物屋として使われている。

運河という小樽市の歴史遺産を捨て去ることなく、その元々の経済機能を変えることによって観光のビジネス化を成功させたのである。バイパスという一時の経済的誘惑ではなく、地域性とビジネスを両立させた観光を成功させたのである。言うまでもなく、この観光は十分持続的でもある。

3. 開発か保全か

観光とビジネスをめぐるのは「開発か保全か」という問いがすぐに浮かんでくる。確かに、リゾート法の例でも分かるように、往々にして私たちはよく開発と保全を二律背反のように考えてしまう。高度経済成長の時代には、人々はどちらかという物質的な豊かさにあこがれていたから、近代的な観光施設に囲まれた場所を選びがちであった。その場合、保全よりも開発ということになる。

しかしながら、現在の日本人の嗜好は高度経済成長期のそれとは大きく異なっている。内閣府の調査からもわかるように、既に1977年（昭和52年）には日本人はモノの豊かさよりも心の豊かさを求めるようになってきている。現在では、60%以上の人々が心の豊かさをもとめていて、モノの豊かさの方を志向するものは30%程度に過ぎない。そのような状況にあって、「開発か保全か」という二律背反的問によって観光とビジネスの関係を考えるのは時代遅れである。

加えて、「開発も保全も」というウインウインのやり方が十分実現可能であることが、小樽市例からも十分理解できるだろう。次の節でそのような例をいくつか出すが、現代の知恵を活かせば開発と保全のウインウインが実現可能なことは明らかであろう。その道を選び取るかどうかは私たちの精神的態度いかんによるのである。

しかしそうはいつでも、現実には問題解決は容易ではない。小樽市の場合でもそうだが、街にはそこに住み、生活を営んでいる人がいる。物質的にも精神的にも豊かになりたいというのが人

間なのである。また人によって何を選び取るか大きく異なる。運河の雰囲気を楽しむ人もいれば、臭いから埋めて欲しいと思う人もいる。ましてそこにお金が絡んでくるとなると、問題は自然と紛糾することになる。小樽市の運河問題が 10 数年をかけて解決されたという事態を見てもよくわかる。

時代の変化とともに街にも変化があるのは当然のことである。好ましいものを残し、好ましくないものを捨ててゆくことができればよいのだが、それは難しい。今述べた通り、何が好ましく何が好ましくないが、それがそもそも人によって異なるからである。人によっては自然環境に重きを置くだろうし、人によっては経済的な面に重きをおく。それを民主主義的なプロセスで解決しなければならない。小樽市のような例は、持続可能な観光という面からも、それを決定した議論のプロセスの面から、高く評価されるべきである。

4. ザルツブルクの例

観光と開発を両立させ、持続可能を成功させた例を海外から選んでみよう。それは、私がとても好きな場所であるオーストリアのザルツブルクである。ザルツブルクと言えばザルツブルク音楽祭やモーツァルトの生家ということで有名な観光地である。私と同じ世代の人だと、ジュリー・アンドリュース主演の『サウンドオブミュージック』の場所として記憶していることだろう。

ザルツブルクは有名な観光地ではあるものの、当地の地域性、文化・伝統、市民生活を同時に大切にしている。地域に根付いた観光地なのである。古い家屋は、市の許可がないと修復さえできないという。市の中央を流れる川ザルツアッハ川に橋 1 つかけるにしても侃々諤々の議論の末ようやくできることになる。

一方でザルツブルクはビジネスのコンベンションセンターなどもあり、多くのビジネスコンファレンスの場所にもなっている。古い街並みを大切にしながらも新しいビジネスの流れに乗り遅れていない。旧市街にあるゲトライデガッセ（穀物通り）を歩くと、ザルツブルクの歴史と伝統・文化の匂いを存分に楽しむことができるが、一方新市街に行くと新しいビジネスの流れを感じ取ることができる、そんな街なのである。

また、郊外に行くと実に魅力的な自然環境が待ち受けている。例えば、ザルツカンマーグートに行くと、息をのむような美しい多くの湖があり、保養地として絶好の場所である。保養地としての賑わいは大変なものであるが、自然環境を大切にしている点は言を俟たない。ここでも、自然環境とビジネスがうまく両立しているのである。観光で地域経済が潤っていることも強調に値する。

5. 身近な観光

しかし私がここで述べたかったことは、もう 1 つ別のところにある。すなわち、身近な場所の観光である。普段何気なく見ているのだが、見過ごしているもので、持続的な観光の対象となるものがある。

それに気づくためにはエスプリが必要である。すなわち、何気ないものを面白がる、そして当意即妙にそれを表現する精神である。物質にこだわらず、精神性に喜びを見出す、そのような観光はそもそも持続的であるに違いない。そもそも物質にこだわらないからである。

例えば、飛騨高山にある国分寺、もちろん観光スポットの古刹であるが、私はそこに限りない心の安らぎを感じる。もちろんその三重塔は美しさにおいて群を抜いている。それだけではない、そこには日々生きる人々がいて、歴史と伝統の中に「何気なく」生きていることが感じられる。

それに加えて、この古刹の歴史を知ると、一層親しみを覚え、繰り返し訪れることになる。観光空間でありながら生活空間でもある。そのバランスが、単なる観光地とは異なる魅力を放っている。

もっと身近な場所を見てみよう。私は横浜市緑区長津田に住んでいるが、周囲をよく見てみると何気ない観光の場所があることがわかる。例えば、我が家のすぐそばにある庚申塚である。私もそうだったが、多くの住民が庚申塚を見ることもなく通り過ぎてゆく。しかし庚申塚が何であるが知っている人は少ない。道教に基づく土俗信仰であり、江戸時代から広まったということである。庚申塔ともいわれるが、気を付けてみると、地藏と同様色々なところを見つけることができる。土俗信仰とは無縁な生活を送っている私たちではあるが、エスプリを効かせてみると、当時の人々の生活のありようが心に浮かんでくる。

もう1つ、私の家の近くには大林寺という曹洞宗の寺がある。地元の人々にとってはもちろんよく知られているのだが、この寺の由緒について知るものは少ないのではないか。1570年の建立、当時の地元の有力者岡野家の菩提寺として創建された。江戸時代には旗本になった岡野家の菩提寺というのだから、地元にとって歴史的意義はとても大きいわけである。

もちろん、地元の人々の日々の営みとも深くつながっている。春には桜を楽しめる。夏には盆踊りやお祭りの場所として人々に親しまれている。大みそかには除夜の鐘、そしてお払いの場所として、新年には初詣の場所として、地元の人々にはなくてはならない場所である。つまり、歴史や伝統と地元の人々の日々の生活がつながっているのだ。

そこにエスプリが加わると、それは一段と輝きを増してくる。生活空間がそのまま観光空間になってくるのだ。そう考えただけでワクワク感が出てくる。大林寺だけではなく、そのような場所は他にも多くある。長津田周辺でいうと、王子神社、福泉寺、隋流院、などもそうである。その他、近くを流れる岩川にある「堰」のあとも水稻耕作の歴史と絡めてみると極めて興味深い。

6. おわりに

持続可能な観光の実現は、地域固有の自然環境、歴史・伝統、文化・社会、そして地域に生きる人々の生活の営みを抜きにして考えることができない。いくら大資本を投入しても、地域性を無視すると、リゾート法に基づいた観光開発がそうであったように、開発は非持続的になるのが落ちである。地域固有の自然環境や文化伝統、歴史を抜きにした開発のみがまかり通ってしまうのだ。生活空間の「匂い」も消し去られてしまう。

もとより、ビジネスと観光を両立させることは可能で、そのようなやり方でも持続的慣行は実現可能である。小樽市やザルツブルクの観光開発が示すように、地域の象徴的存在（この場合は運河や歴史的史跡）を大切に作り上げた街並みは、長期的には人を引き付けることになる。

しかしそれよりもなによりも、身の回りにある場所や建築物を観光の対象として捉えると、それは限りなく持続的な観光になる。日常に織り込まれた観光になるからである。だが、それを観光たらしめるにはエスプリが必要である。ものではなく心、あるいは精神性を重視した周囲への注目、これが身近な観光になるのではないだろうか。改めて自分の周りにあるものをエスプリをもって見直すことが必要である。